發日記

茶の記く序

[illegible]

ちりうこのくさしげもうかんう
はかりまみまうこと吾もうれかく第
きてうこんをやまにはあの地をなみ
川福うこの時はあるとうはまあハ
寄一東二東みちうり拾一ふして
もうの西乾をうつしかうれれか
ちうもうこ千部ハうもちむてのふ
鼻羽の伊勢と奥の西をみうう

かさうこの吉事みおしかうはうう
うはたをあかみもうとしもうはうう
部月の遺草のあるを海とうう
の二夏みうをかうれうもうれみのう
かしかうれをうのうれもうしかう
このりつうみ百余首十みうをうう
をに高よつ月好れもの命をくうう
あはり記をかうをかの記をもうはう

や詩のおもしろ味は
やまとうたの
三十一字を
一字なりとも
何なりとも
ほかもあるべき
ばかりなる
あまりもの
人は足ぬ
ものなれば

しられたるかゆゑにてはなかるべ
をふくあり人のうたまことに
あるべきもの
をもをも風雅の
にくみあんのなかる
雅をいとこそ世の風
みをなるほどあるべきの
やをちらかるべきものなる

あるいつるとしたの月きのあさた
とうつり西ふかめをつくしくめ行し
きせ豊ろとり風雅の上みてとれ
ゆしれうの間

元禄七　しきの稲七月十五日

支考自序

笈日記　上巻

伊賀　郷

貞享五年秋より行月来り芭蕉翁人らしめ
山の紅葉なほ残り行かたもおもかれしよ
尾花枯田もしきみ併をそれくいさしたる事とう
ゝ梅の木なをも表みねをもらわ

乾坤　子之作

冬の野にうゝさんさら梅乃ほそ　風羅坊
しのかうれ行ゆくもたのもかし　一万翁九

かれしてかれたる竹を放ちて君
鮮たる衣の香をおもふ
さびしさのうちにおもしろき橘の香　芭蕉
そのかみは世をのがれたる人の住み捨てし
跡して
まことにけふみる石の上　仝

紀行

さやの舟よりあがりて月のころ九月入てくる
あふさかの山こゆ雪降るころいとおかしさた

おろかしく世にすさみこのぬれ衣とおもひて
やともすれば人をなぐさめ給ひしに
たびきぬの袂にかわきて馬に乗てたつき
ながれの水にかざし花の咲ちる里を
若菜をのせて雪ふりし梅をあるにまかせ
きれの出てやと鳥子のしのぶれか

うちたまを積つき坂を馬で
そのひまにも手の香をむすびし雛のゐる
いつもあはれし

このみちの人ことに坂の脚まで
おろかさしやさきしを　去来

菊の香もこゝに牛もあはれくるの　其角

[illegible]

七月十五日

[illegible]

八月十五日

[illegible]

九月二日

[illegible]

伊勢にてもむくさきや三ケの津の中にさへ
まつたけのさけもいとしところされ

松茸やかぶれた程は松の形　翁

松茸やしらぬ木の葉のへばり付　仝

この松茸をとりの衣れやまにうらけて一気に行り
ながら記さに淀の衣なるやかしうそしと参して

松茸やきみかみち衆山の形　雁然

秋風に新酒を汲ほ淀の風　支考

はたもの山路を衣こゝとみちなししまてその今
こゝろて伊勢やそて笑ならせひはつくれしきのの
山路とるつしさつりなるかさるひよりやされ参

九月八日

行秋や手をひろげたる栗のいが　翁

新酒の旅行これ日本ささきうるゝ衣の旧都の
業陽あさけんやおりくこのなをむかへてもちろしとて
数万をふあて旅をかるみたの中々のこれにとも我らの
路にひくうのみてりわれそるかの比ねハありしくと
こそわさつめつらみそそのひみかとらへが浮そふき
あさましさわなゆるさく仲さされつるその度よみ
抱のるりかとふれしくきのみて指首彩の人中
うさんれたる旅ひぬるのさくうになうんやすてとれそ
こさらし　鏡座より江舟にいかる錢司らいうやら
るとるみ山の脚さむしく峯様の畑なりされ去の

東なりし

うてなは蜜柑の色に黄ばみて　翁

世にうつるものはさびしからずとやられたる
あはれ名月をとりよせては[illegible]
やさしそれも[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　翁

[illegible]　支考

九月九日

菊の香やならには古き仏達　翁

[illegible]　去来

[illegible]　惟然

まゆみ寺やゐんこの文たれ
粟津寺に詣して
若葉して御目の雫拭はゞや　翁
其比元禄七の冬
大仏殿再興とよろこびて
初雪やいつ大仏の柱立　仝

四季

春

山畑をうつゝしらず桜植けり　猿雖

庭掃も厭ふかしきさくら哉　尾次
あかぬ君龍のひさしもふかれけり　一井
春の野はしらぬ人やちらさいて　羅香
帰る鳥の雲ゐや尾も懸　射江
折てしまゝもあらぬ梅の花　藤子
宇るゝみゆりや一枝のもの哉　宇家
さかれたる一声ふかみ柳かげ　諷聲
花つみに蕗のあらそひ　小子 長年

[illegible] 　　士芳
[illegible] 　　臭袋

ぬのあわせとよつゝ
湯の下陰　　[illegible]

[illegible] 　　蕉子
[illegible] 　　北園
[illegible] 　　東来
[illegible] 　　[illegible]

壬生三位基貞の松亜元ちや　　陽和

一花おりしかゝるれを

山路ゝ[illegible]あけくれの梅ゝ[illegible]　　配力
[illegible]ゝ月をかゝ[illegible]の　　吹衣
[illegible]ゝ[illegible]　　答蕉

文

[illegible]　一桐
[illegible]　[illegible]
[illegible]　一万平
[illegible]　陽和
[illegible]　猿雄

雲[illegible]

[illegible]　[illegible]
[illegible]　東来

[illegible]　[illegible]

秋

[illegible]　仝
[illegible]　仙枝

[illegible]

月[illegible]　風脛

日あたりに寒ほされ時雨いとこ　猿雖
片山の秋のさびしさや旅の畑　仝
垣ぬけて芋ほる家のうら　我峯

小坂も桜人なれや花の門　配力
おそろしう入りて入るや桜哉　勇日
ほれやさかる蜜の路　氷国

もろいれ〳〵家ふる本荒れ家の柿　雪芝
星ぬけて机の乃月ぬる　可安
おかくれ小ぞそ〳〵ぬ大なる雨　猿雖
やの日蔵ぬ雪ふる仕ぶ辛り　仏村
汁食さ人ぞ〳〵ぬ九ぶ　九ぶ

そよ風をうつる
くつ新して
君ぶけよ仕ぶあこ雪丸　雪

[illegible]

皐袋

元伝　猿雄

軍のかづきりとりて
[illegible]
はなみたきれもうこ人もゝ　まち
町をもゝ[illegible]の方　十七万
所をもゝ[illegible]の月　万乎
[illegible]ひさゝの朧のもゝ　皐袋
雄

婿かみて紅葉の時雨おそしたり　孝
屏風に離れしのむくり入けり　芳
むしくと海り薩の伴所ある　手
まうひの柳は桿ほんそう　紫
隣さまに寺みれ物皆の冷つきて　雉
四一束の鳥をとさへや　孝
ゐのかく数たる行の桃りぬ　芳
下旬乃旅も八朔のに　手

萩咲くも夜さゝる茄子掘れ　紫
月夜しの書揚り砕みけ　雉
去る年は浮かんで人ぞ花の奥　孝
まちれ小鳥のうたがおかり　芳
商人の若やとられ白き氷き　手
祝ふや餅のちらさず　紫
江戸の角るみをと汐く重　雉
君のあさしれ猫の絶え　孝

ころしたる床をさへ面白き　芦
人はいくつも仮様の文　手
身代を蓄へぬるにをしき道　袋
世乃安ほりを出やれ素麺　維
宵の月を様見かゝる月にてみる　孝
きよみて来るを嘆く秋の暮　芦
焼付てやる草をしのぶなり　手
捨もはや人の人世のつさや　袋

三ヶ月の跡あちこちを御門跡　維
嘆くものさゝ抜やてうてさし　孝
ぎつくりと石のそりぬる椿　芦
る御行の居れ方の経構　手
嘆きつく花をてあまりあには　袋
一望四方の御のつゞや　執筆

[illegible]

[illegible]

[illegible]

連句 [illegible] 人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

これ程りきれや次此わかれこゝとはいひかし
さて睦正秀ありくおな夜の月のかゝはり
をつくらふに従えのふみにこそいへは
おもむきありて

鉢買ておもかげはなれ　翁

十六日の夜去来正秀が文をおくり
くにゝなりての鹿の歌の事に感じて
その夢にみへしを此句あり

小提灯や町をおぼれん鹿の声　丈草

百何草や緒に手ぬぐふ鹿の角　野明

猿のままいし　くもしらぬ鹿　荒雀

掉鹿の尻にをされとらるゝ鹿　左宵

振つけて尾花に乗る鹿の声　風国

寝し鹿を椎のあかれに付るらん　去来

南ち門　まてられ鹿や鹿の趣　正秀

冬の鹿

鹿の影とられて寒き月夜かな　雨堂

武蔵野もしてでねるや鹿の角　支考

川柳ゝ面影ひすこ　雲霧　貞高

其柳亭

秋もなほ残りつゝ雲月の孔　義

はるの夜の朧の月のくもれもて秋もなほ
つゝみかねたいるかわれよりもれくる月の形
かすかなるをやもれ　北万二月の雨も雲
隠るを静かなるものを

秋の夜を打寝し味ふ

はるハ寒貫桔橋の陽を少ゝやわらぎ光
の低討なるものゝ雲れ

風ゝ　あひ

車庸亭

面影を橋の朝立雁や立ゝ　義

北方ハ陸奥の北方を遊ぶ
泥多り集の船遊あり　連衆十二人

人ゆや山ゝ立つて　義

はるやかゝ人ゝ　れ橋の雲

此二句の間いつれをかと申されしに
この道や行人なしにと独歩したる
所誰かその感にこたへんとてこれに
所思といふ題をつけて半歌仙
侍り爰にしるさず

松風や軒をめぐりて秋暮ぬ

是はあるじの男の深くのぞみける
によりかきてとゞめられし

旅懐

此秋は何で年よる雲に鳥

此句はその朝より心に籠て念じ申されしに
下の五文字寸々の腸をさかれけるやそも
やまひのおもれ給ひて身の衰てよわりぬる
や切にひとしほ思ひ入られけるされは秋もし
いかなるものゝあはれさへよりあらん侍者を
旅を思ひ寄られしかやと申されし草のはの方を
なく侍者も云はなくてもへつきうされもく
めぬまうてとめおもりかなれはさきぬやと
かくてちうつきかそんとめる長谷都すてき
よしなの乱世のなかれしみそ羽を
のこかいつくうひてきりもかくしるり結る
くやしさ
はかしいきのもまるろし

白露も月にまてゐる塵もなし　蓼

是そ閑せの風雅の森をみて一華
あそびしけりの一句を生むものなれば
物も一ハその時の面影もてうつれ
れとぞしや

畦止亭

今年も九月九八日の長月ハ秋
のなかばを過しぬかくて七種の菊を植
草かしてれの人ゐ句あつめ花
洛迷ゐ芸候集まり侍れハ宿に
まうさん

咲乱れ菊花ち柳の下にかすみも深
よしみそれのむつかしけれ

秋深き隣は何をする人ぞ　翁

廿九日

けふよりは浅瀬のなくさみあゆみる月

一日の能み乃とゝ志ら能ひ寝ハよめつる

阪のかたをうりくれもそのやうにやと
あんじ思ひ入りに二の云のにくらやと
つのりて物がけ秋のもやうしくるやうなれを
市中のうりを書よう紙正家紙よくいし
くれいはよのつゝの上かうにかきもら
一わうをを為ゝ元関を紙仕ら

十月
五日

此紙南の四堂はおとつかうに而家を
ふつして猛てたちはのうり伊勢屋張れを
きゝ寄人くに文そし先つうにそのを
まの兵をめして身のおに心乃安寧しうら
ふしぎさんしをさとうれ知識なる生
死ハ文余せうそれれ人そし心のやすん
をあるとうとうとやうとして仏のうのを
心うけぬ

六日

きのふのゆきのなごりなるみうしろの深山にはしたち
ふるさとにつもる雪の白雲のうへ
かとまがふばかりにしるくもとくれて
松末の雪と岩ねをうつみおろしてなる
ゆかしきまそ思ふる

七日

けふ御前南北正秀と東船うの者直ね物乃
ちうりにめされて行ものをうたて用
をおもしろくうたひ心ゆかしく
事ぶりその程なさほよ清の古来をうた
その手つうたれ打本尊おはわのしく来り
つぐふ平四の手のゆをうたふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月

之通さしられ四所ゟ使しけるを延引
をいの体所願のるあるをきたいけ和歌
あつまりて如抱よりくる吾舟をあれく
旭の青のかゝりやなをれをいろ〳〵所
恩ゆやとあるよに

病中吟

[illegible]
その好きをあらして　へなぶけ思ふる
心とふ自つくりなられをうやまんし
そり五文字ハ心ふ身ゆるとやをもつ
し染きに作んと書てけ自なれわる
ふまし美人くるゆいるわ思絵の五文字
う作人くそちわいるしこつくりされる
をきと中武の特長作ものをきちう

おつ自まきをわ[illegible]
をんゆ義くるまきれ[illegible]
て、朝やまるる姻のうちをけうきめてらしま
郎馬の郎ゆわもろくそを伊れ立親を
ゆまし作ゆるそこちを今れ為の五ゆわく作
や、ひねを中まし[illegible]の細作をワれ作れ
のくおとふをうれしくあこやされ
やさハう地嘩れ嘩巨ゆくなをちう

[illegible]

九日

服用の[illegible]あるべしとて此度も来る
かりをきくらゝ山[illegible]紙にて[illegible]
のちゝ白おちゝ[illegible]れ[illegible]あり
[illegible]

[illegible]川[illegible]庵ちゝ[illegible]の月

[illegible]の白菊の白菊
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十日

[illegible]
[illegible]

云法にその後まさにとかして貴過去言之通
をもて此一二外又一通ハよろしかるべく修かる
のみの名をおろそかにその後を正義ありし
くりて本意掟の旧草子を今つゝ
是より後十六日の秋曲学者日余りして
おのく題をかへたに修かえ一の名を実を何
事もなくて先さら誤く見てすれおさなしく
其かゆかし名にしや読されしなれ

外の三通まて四ケを各能見の品しくれ
くハ又故文章學のまてもろしきく人
しつの承きるを持ちかり余

一　新式　埋木　二傳

一　古今ノ序註　貞徳一言　〓部

一　三日月の記　奥の細道

一　枝風　銅体

そのかゝる[illegible]の[illegible]
そ[illegible]にて人[illegible]
[illegible]
おなけ人[illegible]
[illegible]
たつ[illegible]
余[illegible]
さうひ真[illegible]

が[illegible]
を[illegible]
やに[illegible]
[illegible]人[illegible]

十一ヵ

[illegible]
[illegible]

その者も明かされんまことにてこそ
なられ共生死も明きまよせまりぬをかなわぬ
ものとうりのやうやし精の為めとの筆かり
なおさてはさしあることなつまるれ
さし後のいとを花よりなまうて最朝ゆて乃
陰をぬぐいぬるぬるたのしをさてけば
さんたんの人をこりさけるあ海を院乗紙
ちんてはあ所しさてあいさん

十二日

されさひ豊のやこつてさとされ
明きをたく人おうねよ来のよ十一月は処う
とさををけ〳〵かさえわれさうふあもけり
さそしちんを人〳〵をいれるよいをこたさ
とさこさん〳〵ろるよ行ちんや午の内ハうん
月のさめさやこれる間　後ちをいれ〳〵御

のうたとりくれたるたてかとれて陰を好
一結びてそりりハ小春九月の色ゆりてあと
うかりれたる陰ふか鏡のあるかりいかるをみくと
てくるもちを年ゆりかりかりかとありくたとも
やとりものありをうんくたくしくりとれ
そのほたとうと何を変もいたりて陰ゆりれ
くるみ作もしも花然としてゆのあとゆ
くくた思いあや けおは舟をくとい

のうれ時れをナこりれ紙仏んくと書
掘れ四ふみ刀れをよりくふ菓れくけい
よれ叶みくれ怪薬をナロりの表かる
ゆ門義ふ姫香のあみ餘哀れくもこ百人
ふ付れ下

十八日

所願忌

湖南北の門人おのゝ義仲寺に会して
無絃塚を造立し芭蕉翁百
年を祭り給ふ月日時雨の降
の東陽子芭蕉一代を往来世れくみて
夏の暑衣を去られたちけり百韵の
暑之

なをかゝる世に生みうるや朽尾花　其角
涼しさやゝ海あれあり　支考
月橋のおのよりとゝまる　木草
乃至

廿日
二十日　此ごろ伊賀に風みありて秋ふかし
この日此ごろ書をかきけるに

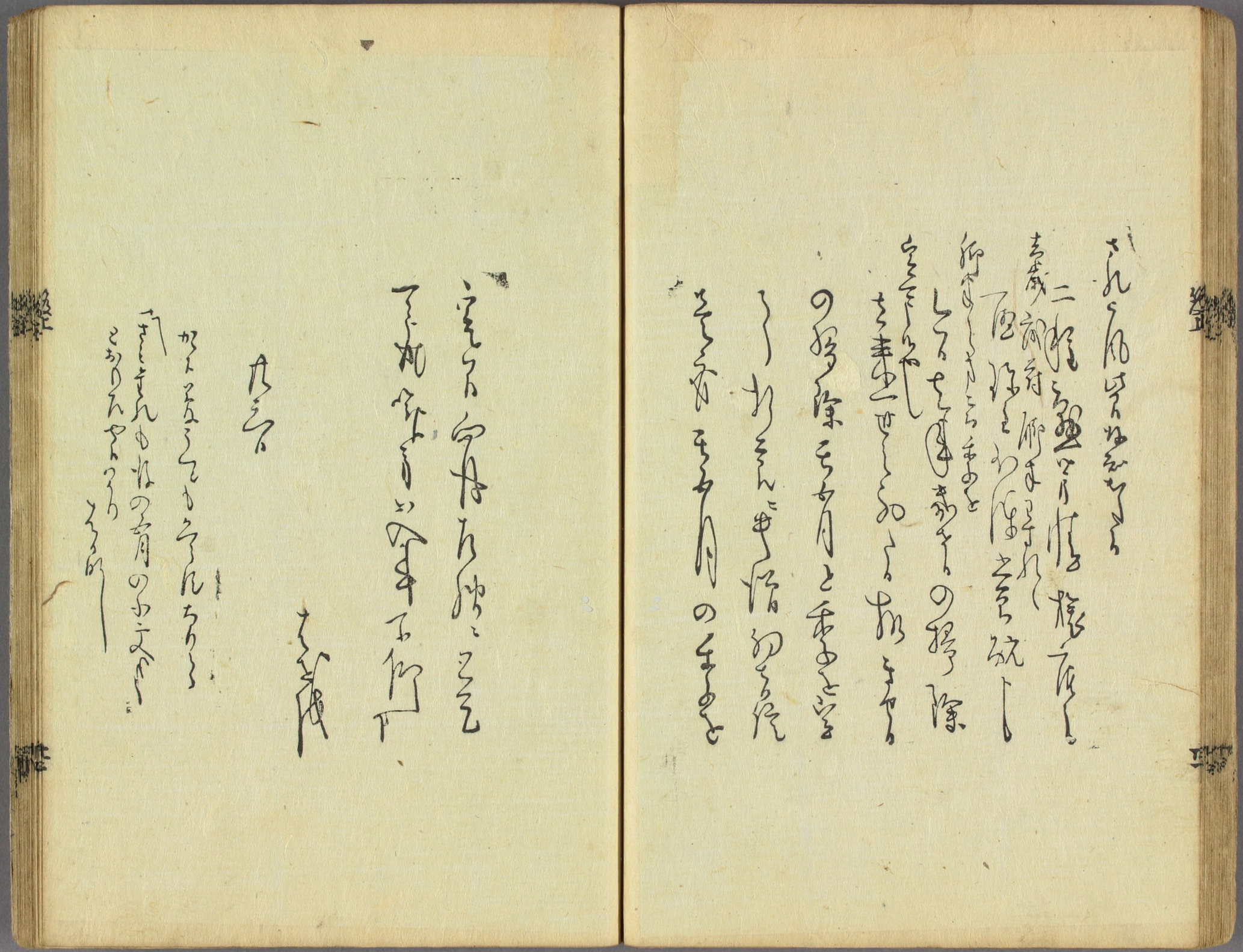
大練忌

茅屋にゝ山つきわたい暁のきゝたゆ一きゝ
なりもなく日ぞうてを名れを枕の夢乃
うもつきまれ此度の旅まいたく
くみうちをれ名前のの十日を
ぬるれやしら波らしこれ枕の白玉

[illegible]

[illegible]

[illegible]



賀

平兼月屋像

こしらへ紙もまるしき秋のそら　義

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小倉山院

[illegible]

嵐山

[illegible]

[illegible]

[illegible]

去来文通

[illegible]

三月十二日　古義のつるみさしつ

[illegible]

二三日ばかりのみ日和やの月夜

業の[illegible]に[illegible]

信州をかたてよりやあとこりり

良化

仝

仝

越中　嵐青

仝

[illegible]

小校

仝

仝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世をのがれて林下の
月にさびしさ慣もつる　惟然
万歳やうの末つゝ四つ九月苔蒸　四季
赤袍を着て
ぐつたりとして
百八の馬も面白やゆ林下　凡國
めるをあれ〳〵あるかまくら　仝
ゆるゝまれ秋をあはれそらや　蓼丸
宝暦舎

枝すかるに向ふもあやうしあるこの　仝
名月
名をかりやこゝにみかさの月光寄　仝
世を四国の時
ゆるさるゝ
夏月〳〵まれもてれあのさや　仝
はるをゆつばーそる
夏月こゝ
七月

去来

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
一つ[illegible]やくそく　来
[illegible]の[illegible]　国
下の村々　牛[illegible]　来
[illegible]　寺
[illegible]　国
[illegible]　来
十六日　[illegible]　寺

[illegible]
[illegible]　国
[illegible]　来
[illegible]　寺
[illegible]　国
[illegible]　来
[illegible]　寺
[illegible]　国
[illegible]　来

[illegible]

[illegible]の下を流る淀川　国

[illegible]　来

[illegible]　芳

[illegible]　国

[illegible]　来

[illegible]　芳

[illegible]　国

[illegible]　来

[illegible]　芳

[illegible]　国

[illegible]　来

[illegible]　芳

[illegible]　国

[illegible]　来

[illegible]　芳

[illegible]　国

[illegible]元禄[illegible]の夏

四月二十五日 桃花

[illegible] 記事

湖南部

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

鼓[illegible]の[illegible]に對し

義

[illegible]の[illegible]

稲[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

木ずえの入りもあらぬ薄の枝　武章

茅生のひさらぬやどの園の表　吉秀

はつ二日さまあれ塚のあたりなる薄の枝
園の表やとなたの墨しかりしかりとて
さすがにそれも一段底のあるおとろ
へいかるるを記しいかるべし

二十夜の月

さしもとしれぬ秋なれども月のひかりを
をとんからんかなて秋の楚江の音をあ
十六夜いまを限るをいさよひをあ

ぬるるさ所也るるとよりれをの峰の
月をあんとんからんかなて秋の楚江の音をあ
をさきしるるをあり
あり月をあるるあるあるの月の宵の月
十六夜の月をあるるあるの月の宵の月
あるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あるるるるるるるるるるるるるるるるる
あるるるるるるるるるるるるるるるるる

十三夜

うかれたる蛙の月の宵の月　武章

月の宵をやどの月の宵の月　吉秀

十四夜

来てなたとうの宵の月九客　羽

五笠さてて秋くれの月見哉　素

十六夜　三句

やれくとてうきよ伊のもし　羽

十六夜や酒き梨る秋九の風

その夜ほんこんの

月すしてのよほ堂

須あけて月さしのよほ堂

九月九日

一杯なとうきよ月みる

菊よれ戸やりさてて菊の酒　羽

蛙よみの行るの桶乃月　九句

正月元日初会寄月の時

月ちや膳ゆ玉を宵九花　羽

元日ちなとうきよ燈　二句

[illegible]

激力[illegible]

[illegible]　二句　[illegible]

[illegible]煮れ　れ[illegible]

湖や[illegible]

湖水田植

渺々[illegible]田植や　仝

世[illegible]
田家[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月代みるつくしてあり野の草　正秀
日のあつさ蓮の葉　探芝
涼しさやうゝしわをわけ出す　墨雲
いそぐ蚊帳をつけるゆふべ　除力
一ふり柳をゆるめる色清の秋　鄭經
そよ吹風もあるけあるきたる　ゆかあ也
つなりて杖の笠よすれ蓮の花　立龍
蓮の葉ふみみやこの秋の朋　卽爲

端午五月つゝ行の松の根に　拙江
白牡丹ゑを笑ふ松の花　知月

秋

稲つゝやゆめこゝろもとめる　卽爲
稲妻あるゝ夜を伝しる　正秀
形ゝる年ゝ月ゝ　野經

別墅

いさゝいのゝゝやゝ　曹翠

[illegible]　昌房
[illegible]　仝
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

[illegible]
[illegible]　正秀
[illegible]　仝
一[illegible]　[illegible]

[illegible]　探芝
[illegible]　[illegible]

雜陰

四月[illegible]　[illegible]月　[illegible]
青月の[illegible]　[illegible]

[illegible]の陰みなん

[illegible]　[illegible]扇　[illegible]
[illegible]　[illegible]扇　[illegible]

色うすき梅の花ちるかの方　曲翁
一よさに猫もあくびやけどゝ　お亭

雪仙

雪ふるしもやまとなるらん部屋
もとゝ雪とあらしを吹れと　素秀
草庵を御をたのくを折まけて　雪洗
秋の雨はをあるよ雪のよ　高
一ぱいの雨を吹るれ月の月　考
うつくしさをれ明るを　秀

言葉の行んさ知らぬ　高
中百姓　一て言葉をつく　芳
陳うゝゝひみ知らる馬のめ　秀
ふのゝ行うんてゝゝき　立
惟子の所れを好みゆんさる　寺
ちつさに絵一言葉む用　秀
ちゝゝゝ新ぬ花ゆ身の乳　高
あのゝゝ穂を重の寸法　寺

陽り酒鼻ゆ碎ゆ言葉りて　秀
牧のゝゝ法をかゝゝゝ　立
何方ゝゝ○れ花ゆ十日　寺
業種の中れ雲花ゆて帰　秀
在江かゝ言信ゝる物法一把　高
ゝんざめ言を高ゝゝゝ　寺
ゝゝゝ江白ゝれ法のゝ言ゝ　秀
ゝゝゝゝる雲かゝれの　高

まもあやにくの深草やさと　芳
ついしるべ　秀
草履をたづねつゝ　肩
仮屋のそとまで案内やん　芳
南の工夫みるの益　秀
月雪をとうゝ十六　肩
握はなのちつさい房みづ　芳
ぐんかの男ぶり　秀

ぐるくるを沖のやうに　肩
馬鬼の上の係り　芳
千石の二番の弟　秀
三月おしをもまされとげる　肩
新つきの稽古　芳
家みるをてゝ淀もよいめ　秀

太一集ちゝ孫乙矣の友
四月十二日本宮係の四字を
めゝ記事
連元十五人